

## はじめに——ワークショップ開催の経緯・背景と概要

未曾有の感染症（新型コロナウイルス COVID-19）が世界的に蔓延するなか、私たちの日常は一変した。学界においても各方面の様々な学術研究学会等の中止や延期の判断が相次ぎ、鶴見大学仏教文化研究所主催で開催を予定していたシンポジウム（二〇二〇年六月十三日）も、今年度内の中止を余儀なくされた。しかし、いかなる状況下においても、研究の遂行を止めることなく、機に応じた歩みを続けることが望ましい。そこで急遽、鶴見ヶ丘学術協力事業のもとにこれまでに蓄積してきた事例の中から、護国経典である『金光明最勝王経』について、大本山總持寺祖院に蔵される近世の版本の分析を遂行すべく、同版本あるいは最勝王経に関連する周辺の問題を含めたワークショップの開催を企画するに至った。

機縁は、能登の總持寺祖院における典籍調査に遡る。昨年、経蔵内の所蔵聖教の調査（二〇一九年六月十九日から同二十一日、尾崎正善客員研究員のもと、小島裕子特任研究員、武井慎悟特任研究員（当時研究生）の三名で入蔵調査）を行う中で、近世版本の『金光明最勝王経』（十冊一結）の所蔵が見いだされた。一見して、かつて小島が真言寺院である慈高山金剛院（東京都八王子）で披見したことのある経典と版を一にする、江戸時代の装飾版本と比定し得るものであった。その摺りが「秋葉蔵版」になるものであったことから、奇しくも秋葉信仰を研究の一面に置く武井との間で研究を進めてみることに可能性が生じた。その後、折にふれ、研究所内において様々な研究動向を話す機会を重ねる中、一つの経典を各々の研究の視座から研究し、その成果をもって祖院への調査報告とすることができるであろうことを確認しつつあったが、疫禍のもとでその研究としての扉は開かれた。

疫病や災害にも説示の及ぶ『金光明最勝王経』は、奈良時代にわが国に請来されて以来、護国経典として受容と信仰の歴史を重ねたが、同版本の伝来経緯を含めた研究が進むことは、祖院所蔵聖教の研究としても、最勝王経自体の研究としても、また宗教史的な見地に一例を投じる報告としても、意義あるものと思われる。

もとより経典を見据える研究であるがゆえに、その教学史を踏まえることは必須である。『金光明最勝王経』を含む『金光明経』の漢訳諸本について、宮崎展昌専任研究員に中国の史伝・経録類からの知見をいれた研究報告を請い、広くアジア全域に及ぶその展開の先に、わが国の同経に対する信仰の一端を位置づけてみることを試みた。

ワークショップのテーマを、「護国経典『金光明最勝王経』版本をめぐる信仰と受容のあり方——大本山總持寺祖院所蔵版本の披見にちなんで」と題して、左記の如く、宮崎・武井・小島の三者による報告を行った。当日は、大山喬史学長、橋本弘道所長をはじめ、諸先生方にご参加頂くとともに、三密を避ける観点から、試みにオンラインによる公開の場を設け、関心のある方々にご参加頂いた。

まず、シンポジウムを開くにあたり、報告者の宮崎は、「『金光明経』の翻訳と伝承に関する諸問題」と題して、『金光明経』の漢訳諸本の訳出と伝承をめぐる、中国で編纂された史伝類や経録類における記述をあらいなおす試みについて発表した。特に、これまでにならぬその訳出や伝承状況についてはほとんど明らかにされてこなかった『合部金光明経』の編纂事情・背景について解明を試みた。あわせて、『金光明最勝王経』をめぐる訳出状況については、経録の記述や訳場列位を紹介し、他の研究発表への導入とした。

報告者の武井は、「秋葉蔵版『金光明最勝王経』——近世秋葉信仰と總持寺——」と題して、總持寺祖院蔵、秋葉蔵版『金光明最勝王経』について、書誌情報を整理した上で、近世總持寺に『金光明最勝王経』が伝来した契機を分析

し、報告した。また、本経は秋葉藏版であることから、近世秋葉信仰と『金光明最勝王経』のつながりについて言及し、秋葉信仰を中心とした金光明最勝王経に関わる近世の信仰実態に関する報告を行って締めくくりとした。

報告者の小島は、「江戸期正徳版『金光明最勝王経』とその信仰——井伊直治願経、訓読、浄嚴の陀羅尼梵音のことなど」と題して、總持寺祖院に所蔵される秋葉藏版の識語に「江府寂紫居士」の刻本をもとに同経が刊行されたとする記述に注目し、原本と目される「今一つの『金光明最勝王経』の版経」に遡り、同経が彦根藩主井伊直治によって刊行された願経であることを明かした。〈金光明経〉諸本の中で、密呪の増補が著しい義浄訳の最勝王経が、変相絵図・訓読・陀羅尼梵音などを伴い、わが国の江戸期に弘通した、信仰と共なる經典の実態を跡付けた。

なお、各々の研究報告について、木村清孝特別顧問よりコメントを頂戴した。個々の研究に対する教示とするともに、今後の同経の研究に向け、ここに掲載する。

疫禍のもと、それまで変わらないと思って過ごしていた日々が、かけがえのない日々であったことを多くの人々が切に感じる今。仏教文化研究所として、学術的観点から、人間が生涯において直面し得る災禍・饑饉・亢旱・疾疫・憂惱・闘諍等に説示を及ぼす經典の中に、或いはその受容史に、切なる思いを掬い取り、そこに寄り添う叡智の幾ばくかを拾う機会となればと願い、録す。

（文責：小島・武井）